川崎医療福祉学会誌　Vol. 14　No. 2　2005　443–449

資　料

看護学生に実施した「面接技法」の授業評価

關　戸　啓　子[*1]

はじめに

大学教育において，FD（Faculty Development）という言葉は定着しつつある．特にここ数年で，急速に大学教育のなかに浸透してきたといえる．FDを広義に訳すと，大学教員の資質開発[1)]である．狭義には大学教員が所属大学における義務を達成させるために必要な専門的能力を維持・改善するための方策や活動を意味し，大学教員研修と訳されることもある[2)]．これまで大学の講義は，伝統的に知の継承に主眼がおかれ，講義は教員から学生へ知識を伝授するのが一般的であったが，これでは学生の意欲や積極性を引き出すことができず，学生は受動的なまま取り残されるという問題が生じ，新しい時代に適応した授業法の開発が求められている[3)]．そこで，大学教員に必要な専門的能力のなかでも，教育に関する能力の向上や開発を目的としたFDに取り組んでいる大学が多いのが現状であろう．

著者も，2002年にはじめてFDの合宿研修会に出席する機会を得て，基礎プログラムを修了した．この中で，教員から学生へという一方向の講義ではなく，「双方向性」の講義が学生から求められている[4)]ことを知った．「双方向性」の講義とは，教員と学生の間で，あるいは学生同士の議論や対話を通じて進められる授業であり，この「双方向性」を確保する授業とは具体的には，次のような方法を用いることを意味する[4)]．① 書かせてみる（黒板に書かせる，あるいは小論文，メモ書きを出させて紹介する)，② やらせてみる（小討議をさせてみる)，③ 言わせてみる（質問をする，問答法を用いる）である．研修後，さっそく担当教科の単元にこの方法を取り入れ，2002年と2003年に実施した．取り入れたのは，「看護援助論」という看護学生を対象とした1年次に開講される教科の中にある，「面接技法」という単元である．看護者にとって，対象から情報収集を行うことは重要な技術のひとつである．面接して得た情報をもとに，どのような援助が必要で，何を援助すれば良いのかが計画されるのであり，情報収集が適切に行われることが基盤となる．このように「面接技法」は，看護を展開する上において根幹となり，学生にはぜひマスターしておいて欲しい技術である．よって，「面接技法」に双方向性を確保した授業方法をまず取り入れてみることにした．

今回，この方法による講義を評価して，より改善するための資料を得ることを目的に，「面接技法」終了直後の1年生と1年前に授業を受けた2年生に授業評価を依頼した．その結果，今後の授業方法について示唆を得たので報告する．

「面接技法」の位置づけ

「看護援助論」は，2年次に開講される「看護技術」への導入的教科目で，「コミュニケーション」「面接技法」「カウンセリング」「看護記録と報告」「生活に支障がある患者の援助」という単元から成り立っている．15回で30時間の講義である．その中で，「面接技法」は「コミュニケーション」の学習に引き続いて，コミュニケーションを用いて，意図的に情報収集する方法として学習するという位置づけである．

「面接技法」の位置づけ

「面接技法」の単元において，双方向性を確保した講義を行った．双方向性を確保する手段として，学生に模擬面接を体験させ，その体験から情報収集に用いる質問法の長所と短所をグループで発表させる方法をとった．学生が興味を持って問題を発見し，学生参加型で授業を展開するよう工夫した．「面接技法」の講義における，具体的な講義の進行は次のとおりである．（資料の指導案参照）

1. 教員が，面接時に用いる5つの「質問法」について説明する．
2. 学生を3人グループにする．
3. 面接する内容を書いた情報収集用紙を1グループに3枚渡す．（用紙は3枚それぞれ違った色を準備）
4. 学生は情報収集用紙を1枚ずつ取る．
5. 教員が，情報収集用紙の色によって，使う「質

*1 徳島大学　医学部　保健学科
（連絡先）關戸啓子　〒770-8509　徳島市蔵本町3-18-15　徳島大学

問法」を１つに限定して指示する．

6. 学生は，限定された「質問法」のみを使用して，学生同士で決められた時間，模擬面接に参加する．
7. 学生は，３人グループで役割を交代しながら，被面接者と面接者の両方を経験する．
8. 学生は，使用して気がついた「質問法」の長所と短所をメモする．
9. 黒板に，「質問法」ごとに長所と短所を各グループが書き出す．
10. 学生が黒板に書いた長所と短所について，教員が説明を加える．
11. 学生が黒板に書いた長所と短所を用いて，教員が適切な「質問法」の用い方についてまとめる．

研究方法

2003年10月に，「面接技法」を受講した看護大学１年生に授業評価を目的とした，アンケート調査を実施した．同時に，前年度「面接技法」を受講した看護大学２年生にも同じアンケート調査を実施した．

アンケート調査にあたっては，研究の趣旨，成績とは無関係であること，研究協力は自由であること，および学会誌への投稿と学会での発表を予定していることを説明し配付した．その後，教員が退室してから記入し，研究協力に同意した学生のみがアンケート提出箱に入れることとした．

アンケート用紙は，無記名とした．本講義に対する「授業評価」として設問を６項目設けた．評価方法は，「徳島大学 FD 推進ハンドブック（第２号）」[5]のなかから，授業毎に評価を行う場合に用いる「ミニッツペーパー型」のものを参考に作成した．「ミニッツペーパー型」とは，数分で記入できるように数項目の設問と自由記述欄で構成されており，毎回の授業ごとに評価を行う場合に適した方法である．特に本調査では，２年生は１年前に受講した講義を振り返って評価することになるために，細かい質問項目を多く設けても回答が難しいと予測され，「ミニッツペーパー型」を用いた．「ミニッツペーパー型」は，各講義ごとの学生の授業内容に対する理解の程度や教材の適否を推移としてみることを目的に，評価も数値で行われることが多い．そこで，本調査でも，質問項目は「授業内容の理解に関すること」と「授業方法」とし，５段階の評価とした．５段階の評点は０～４点で配点した．講義に関して自由に意見を記載できる欄も設けた．

１年生は65人に配付し，58人から提出があった（回収率89.2％）．２年生は68人に配付し，33人から提出があった（回収率48.5％）．どちらも，有効回答率は100％であった．

結果の比較には，Wilcoxon の順位和検定を用いた．

研究結果

授業評価の結果は，表１に示すとおりであった．これを，平均点について図にしたものが図１である．

評価項目の中で，「授業内容が理解できましたか」「授業は楽しかったですか」「授業内容に満足できましたか」「授業の構成は適切だったと思いますか」「授業に使用した教材は適切だったと思いますか」という５項目の設問においては，１年生と２年生の評価得点に有意差は認められなかった．かつ，すべての項目において評価得点は，3.2点以上であった．

「将来，役立つと思いますか」という設問においては，１年生は3.60±0.65という評価であったのに対して，２年生は2.73±0.76であり，この回答には，群間で有意差（$p<0.001$）が認められた．この設問における２年生の回答が全評価の中で最低点であり，平均点が唯一２点代であった．

自由記載では，模擬面接を体験したことが良かったという意見が多かった．

考　　察

「将来，役立つと思いますか」という設問以外の項目では，１年生も２年生もよく似た回答結果であった．かつ，全て3.2以上の評価であり，双方向性に行う講義の効果は高いといえよう．自由記載においても，模擬面接を体験して理解が深まったこと，参加型の講義で楽しく眠くならなかったこと等が評価されていた．学生の私語や居眠りを無くし「学生をたるませない授業」の方法として，宇佐美[6]も一方的な講義をやめ，学生が探究意欲を持って，自らが緊張して頭を使っている状態を保たせる講義方法を工夫すべきだと述べている．学生の成績評価の対象とはしていないが，授業後回収している模擬面接で用いた「情報収集用紙」を見ると，学生は模擬面接の体験から各質問法の長所と短所を適切にメモしており，教員が伝授したかった内容を，自らが発見的に学習できている様子が窺える．双方向性を持った講義，すなわち学生に探究心を持たせ，参加型で行った講義が有効であったことが示唆されたといえよう．

一方，「将来，役立つと思いますか」という設問に対しては，１年生に比べて２年生の評価が有意に低かった．今回は，同一の学生を対象とした追跡調査ではないため，はっきりとはいえないが，２年生の評価が低いことは，看護の学習が進むにつれて「役立つ」という思いが薄れてきたという可能性がある．

表１　看護学生を対象とした「面接技法」の授業評価結果

評価項目（設問）		評価学年	授業評価得点 4点	3点	2点	1点	0点	平均点	Wilcoxonの順位和検定
授業内容について	授業内容が理解できましたか	1年	３３人 (56.9%)	１７人 (29.3%)	８人 (13.8%)	０人 (0.0%)	０人 (0.0%)	3.43±0.73	n.s.
		2年	１１人 (33.3%)	１８人 (54.5%)	４人 (12.1%)	０人 (0.0%)	０人 (0.0%)	3.21±0.65	
	授業は楽しかったですか	1年	３９人 (67.2%)	１４人 (24.1%)	５人 (8.6%)	０人 (0.0%)	０人 (0.0%)	3.59±0.65	n.s.
		2年	１９人 (57.6%)	１４人 (42.4%)	０人 (0.0%)	０人 (0.0%)	０人 (0.0%)	3.58±0.50	
	授業内容に満足できましたか	1年	３２人 (55.2%)	２１人 (36.2%)	５人 (8.6%)	０人 (0.0%)	０人 (0.0%)	3.47±0.65	n.s.
		2年	１６人 (48.5%)	１６人 (48.5%)	１人 (3.0%)	０人 (0.0%)	０人 (0.0%)	3.45±0.56	
	将来，役立つと思いますか	1年	４０人 (69.0%)	１３人 (22.4%)	５人 (8.6%)	０人 (0.0%)	０人 (0.0%)	3.60±0.65	p<0.0001 （ｚ値：4.99）
		2年	６人 (18.2%)	１２人 (36.4%)	１５人 (45.5%)	０人 (0.0%)	０人 (0.0%)	2.73±0.76	
授業方法について	「授業の構成」は適切だったと思いますか	1年	３３人 (56.9%)	１９人 (32.8%)	６人 (10.3%)	０人 (0.0%)	０人 (0.0%)	3.47±0.68	n.s.
		2年	１３人 (39.4%)	１９人 (57.6%)	１人 (3.0%)	０人 (0.0%)	０人 (0.0%)	3.36±0.55	
	「授業に使用した教材」は適切だったと思いますか	1年	３６人 (62.1%)	１６人 (27.6%)	６人 (10.3%)	０人 (0.0%)	０人 (0.0%)	3.52±0.68	n.s.
		2年	１５人 (45.5%)	１２人 (36.4%)	６人 (18.2%)	０人 (0.0%)	０人 (0.0%)	3.27±0.76	

自由記載
１年：模擬面接を行って，楽しみながらも理解が深まった．（４人）
　　　模擬面接を行うことによって，質問法の長所と短所が良く理解できた．（２人）
　　　模擬面接はうまく出来なかったけれど，逆に自分の課題がわかって良かった．
　　　講義ではなかなか頭に入ってこないような内容も，このように体験すると良く覚えることができた．
　　　プリントも見やすく，重要なところは自分で記入するようになっているので分かりやすい．
　　　模擬面接で，役になりきるのは難しかった．
２年：模擬面接などを取り入れて，眠くならない講義で良かった．
　　　学生が理解できることに講義の視点をおいてくれていて，わかりやすい．
　　　学生が参加できる講義なので良かった．

注）１年生：ｎ＝５８人，２年生：ｎ＝３３人

今回の調査では，この要因については検討できるような設問がなく不明であるが，今後調査を行い，「面接技法」で講義する内容を見直す必要があろう．予測される原因としては，「面接技法」で教育する内容を「質問の仕方」に限定しすぎたことも考えられる．双方向性を確保した講義は，有効な講義方法ではあるが，教育する内容が限られるのも事実である．今回行った「面接技法」の内容も，一方向から行う講義であれば，20分程度で説明できる量である．それを，双方向性を確保する講義方法にした場合には，90分を要している．教授方略として，教育内容を簡潔化し，ポイントを繰り返し強調することは原則[7]であるが，今回の評価を見ると簡潔化するための，内容の精選に問題があった可能性もある．今回調査した，２年生は，１年生の授業直後の評価が不明であるために，１年生の時に「役立つ」と思った知識が，２年生になって「あまり役立たない」と思うように変化したのかは不明であるが，看護の学習が進んで，より知識が複合的になってくると，知識を統合するにあたって，基礎となる「面接技法」の知識が，実際の患者に行う応用の場面に，そのままでは適応できないという現象がおきているのではないだろうか．

また，今回は試行的に，一つの単元にのみ双方向

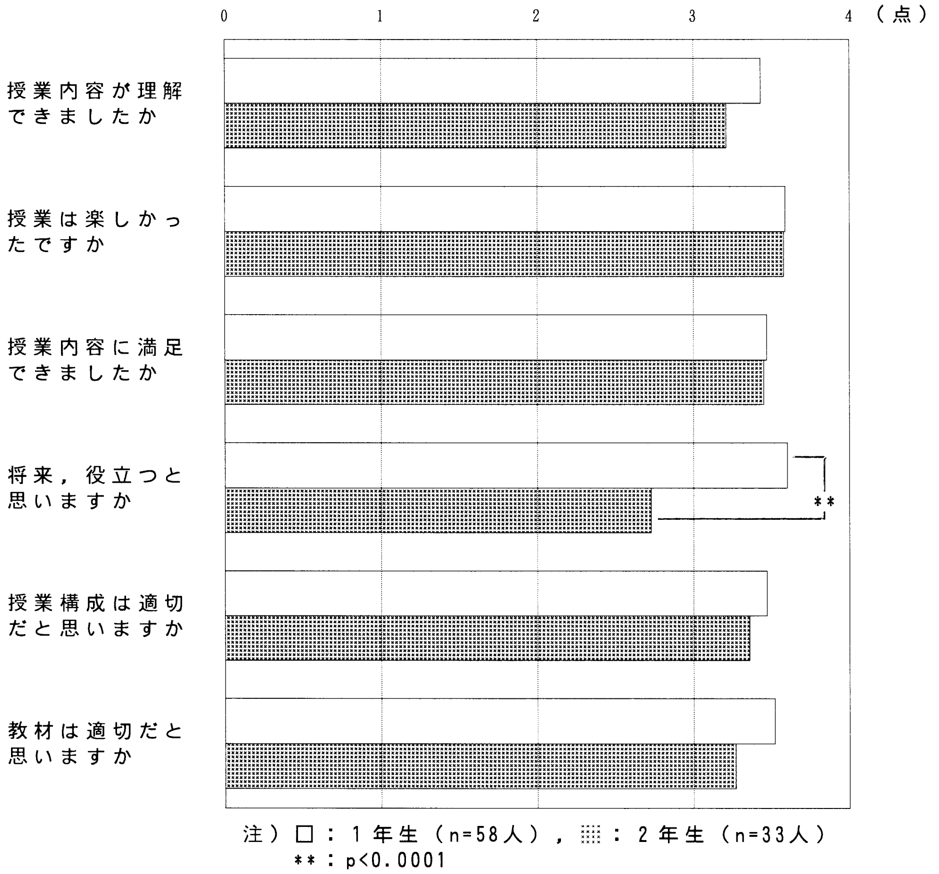

図1　看護学生を対象とした「面接技法」の授業評価結果

の講義を取り入れたことも，バランスを欠いていたのかも知れない．今後，このような推測される原因も考慮しながら，検討していきたい．

おわりに

今回の授業評価結果から，双方向性が確保された講義の有効性が示唆された．その一方で，「面接技法」の講義における課題も明らかとなった．看護者を目指す学生を教育する上で，講義内容が将来役立つかという評価が低いことは，早急に改善しなければならない課題である．講義内容について，再検討が必要である．加えて，教科目全体の講義内容の調整が重要となる．双方向性を取り入れた講義は，講義内容が限られるために，講義内容の吟味と合わせて，どこの単元にどのように導入することがより有効なのか全体のバランスをみながら計画することの大切さがわかった．

本研究の一部は，日本産業教育学会第45回大会（2004年）において発表した．

文　　献

1）有本　章：ファカルティ・ディベロップメントの歴史と展望．IDE 現代の高等教育，412，5–11，1999．
2）原　一雄：大学教育学会の FD 研究活動．IDE 現代の高等教育，412，66–70，1999．
3）阿部和厚，西森敏之，小笠原正明，細川敏幸，高橋伸幸，高橋宣勝，小林由子，山舗直子，大滝純司，和田大輔，佐藤公治，佐々木市夫：大学における学生参加型授業の開発（2）．高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—，**6**，156–168，1999．
4）曽田紘二，石村和敬，金城辰夫，平井松午：わかりやすい講義の仕方ハンドブック．徳島大学大学教育委員会監，徳島大学 FD 推進ハンドブック第1巻，初版，徳島大学大学開放実践センター，徳島，45，2002．
5）曽田紘二，長積　仁，寺嶋吉保，井上哲夫，佐竹昌之：授業評価アンケートの作り方・フィードバックの仕方ハンドブック．徳島大学大学教育委員会監，徳島大学 FD 推進ハンドブック第2巻，初版，徳島大学大学開放実践センター，徳島，76–114，2003．

指　導　案

教科目：看護援助論　　担当：關戸　啓子
対　象：看護学専攻1年生（必修）　　場所：○○○講義室
日　時：毎週○曜日　○時限　　本時：平成○年○月○日　　No. 1

テーマ	医療の場における的確な患者の情報収集のための質問の仕方
目　標	1）患者の情報収集に必要な質問の仕方が説明できる 2）各質問法の長所と欠点が説明できる 3）正確な情報をすばやく得るためには，各質問法をどのように使いわけるとよいか判断できる（次回も含めての目標） 4）面接場面で起こる沈黙には，どのような意味がある説明できる

時間	指導項目	指導の要点	教　材
15分	前回の復習とまとめ	・前回に学習した，面接場面における6つの態度分類について，再度説明し，プリントの空白部分に態度を記入させる． ・望ましい態度と望ましくない態度について，教科書で再度確認する．	プリント①・②を配付 教科書
	導入	・本日の学習テーマと，本日学生が理解しなければならない事項について説明する．	プリント①
10分	質問の仕方（講義）	・5つの質問の仕方について，教科書を中心に説明する。ただし，各質問の特徴（長所とか欠点等）については，ここでは説明しない． ・教科書の質問の仕方の例を示してある部分については，学生を指名して読ませる． ・プリントの空白部分に適切な言葉を記入させる．	教科書 プリント②
10分	沈黙の意味（講義）	・5つの沈黙の種類について，教科書を中心に説明する． ・沈黙に付き合う難しさと沈黙の持つ重要性について，例をあげて説明する． ・プリントの空白部分に適切な言葉を記入させる．	教科書 プリント②
30分	情報収集のシミュレーション（演習）	・前回「この前の日曜日には何をしてすごしましたか」ということを，学生同士でインタビューするので，準備しておくように伝えてある．（つまり，本当のことでなくても良い） ・3人グループを作るように指示し，人数調整を行う． ・1グループごとに3色1組の情報収集用紙を配付する． ・演習方法について説明する 1）教科書を閉じる。（教科書には解答があるため） 2）3人が一つのグループになって行う． 3）1人のインタビュー時間は5分とする． 4）指定された，質問法のみでインタビューする．	情報収集用紙（3枚3色1組）を配付 プリント②

No. 2

時間	指導項目	指導の要点	教材
                    10分	 （板書）	5）日曜日の過ごし方については，可能な限り経時的に，いつ，どこで，何をしていたのか質問して記入する． 6）記録はえんぴつ書きで良い． 7）最後に，使用した質問法でスムーズだった点と，困った点についてメモする． 8）各グループ最低ひとつは，白板に上記の点を書く． ・演習方法について質問はないか確認する． ・黄色の情報収集用紙を持っている学生は，「直接的質問法」のみでインタビューするように伝え，面接を開始させる． ・5分終了後，次はピンク色の情報収集用紙を持っている学生が，「自由質問法」のみでインタビューするように伝え，面接を開始させる． ・5分終了後，最後は緑色の情報収集用紙を持っている学生が，「多項目質問法」のみでインタビューするように伝え，面接を開始させる． ・シミュレーションを学生が実施している間，その様子を見てまわり，適宜アドバイスを行う． ・体験してわかった，各質問法の良い点や悪い点をメモし，代表者は白板に書くように指示する．	白板に学生が質問方法の特徴を書けるようにスペースを準備する。
10分	各質問法の長所と欠点	・学生が白板に書き終わったら，「各質問法の長所と欠点」のプリントを配付する． ・プリントはすでに教科書で述べられている長所と欠点については記入済みなので，白板の内容を確認しながら，新たな意見についてはプリントに書き取らせる． ・白板の内容をもとに，各質問法の特徴とどんな時に使うとよいのか説明する．	ﾌﾟﾘﾝﾄ③配付
5分	まとめ	・再度，本日学習した「質問の仕方」とその特徴「沈黙の意味」について説明する．	
	次回の予告と準備について	・次回は，本日学習した「質問の仕方」を，どのように使用するとスムーズにインタビューできるのか体験的に学習する． ・医療従事者としての立場でのインタビューを練習するため，「何かの症状があって外来を訪れた患者」への情報収集のシミュレーションとする。そのため，学生はその役割がとれるように準備しておくように伝える．	ﾌﾟﾘﾝﾄ②
	情報収集用紙の回収	・評価と関係ない旨を伝え，情報収集用紙を回収し，出欠の確認に変える．	情報収集用紙の回収

※教科書：太湯好子著「患者の心に寄り添う聞き方・話し方ーケアに生かすコミュニケーション，メヂカルフレンド社，2002年

6）宇佐美寛：看護教育の方法．医学書院，東京，18–21，1992．
7）ナンシーＩ．ホイットマン，バーバラＡ．グレアム，キャロルＪ．グレイト，マーリン・ダンカン・ボイド（安酸史子監訳）：ナースのための患者教育と健康教育．医学書院，東京，235–238，2002．

（平成16年11月30日受理）

Lesson Evaluation of Interview Techniques by Nursing Students

Keiko SEKIDO

(Accepted Nov. 30, 2004)

Key words : lesson evaluation, interview techniques, nursing students

Correspondence to : Keiko SEKIDO
Major of Nursing, School of Health Sciences
The University of Tokushima
Tokushima, 770-8509, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.14, No.2, 2005 443–449)